

道徳教育・その基礎となる心の探求

— 廣池千九郎を手がかりとして —

石川 恭治

目次

はじめに

一、道徳科学専攻塾の主な特色

- (一) 無試験制度について
- (二) 寄宿舎制度（寮制度）について
- (三) 男女共学制度について
- (四) 外国語教育について（本科生）
- (五) 教育理念について
- (六) 道徳の授業

二、廣池千九郎の「心」の支柱

キーワード… 廣池千九郎、道徳科学専攻塾、無試験制度、最高道徳、廣池千九郎記念館、崇高なる使命感

はじめに

近代日本の「道徳教育」を考える時、看過できないものがある。それは、「道徳」を専門的に学ぶ学校が存在したことである。同時に、その学校が今でも発展存在し、「道徳教育」が、現在も継承されているということがある。

法学博士廣池千九郎が、昭和十年（一九三五）、千葉県東葛飾郡小金町（現千葉県柏市光ヶ丘）の地に開いた「道徳科学専攻塾」がそれである。この「専攻塾」は、戦後も続き、現在、「麗澤幼稚園」「麗澤中学校」「麗澤高等学校」「麗澤瑞浪中学校」「麗澤瑞浪高等学校」「麗澤大学」「麗澤大学大学院」となり、平成二十二年（二〇一〇）に創立七十五周年を迎える今も、「道徳教育」を継承実践している。

人は人として成長する過程に、必ず何らかの道徳教育を受けて育つ。本人の意志に関わらず、社会に生きる一人の人間として、関係社会から教育を受ける。近代において学校制度が出来ても、それは変わらない。昨今の日本において、家庭、学校、社会の教育が、いかに「衰退している」と叫ばれても、そこに道徳教育が全くないのかという点、そうではない。良き人間として生きて行くように、生きて行けるように、道徳・道徳教育の配慮がなされているのである。つまり、教育をする側、教育をしていく人間の、「心づかい」が事実として存在するのである。

今日まで、道徳・道徳教育では、対象になる児童生徒・学生・人物に、何らかの制度や教育をする方法等が問題点として挙げられることが多い。しかし実際は、教育指導する人間の方を、問題にすべきではないかと考える。特に、指導する人間の心のあり方が、大変重要なのではないか、と思える。

そこで、本稿においては、道徳を専門的に学ぶ学校を創立した、廣池千九郎の「心づかい」はどのようなものなのか。それを手がかりに道徳教育の基礎となる「心」を探求していきたい。あわせて、その心づかいが、道徳教育をする人間に共有できる心なのかをも、明示していきたい。

一、道徳科学専攻塾モラロジーカレッジの主な特色

「道徳科学専攻塾 (The College of Moralogy) 本科規則」⁽¹⁾第一条によると、「道徳科学研究所はこれを研究部、開発部の二部に分かち、しこうして従来、研究部においては、つとに助手を研究生として養成し、開発部においては、モラロジー講演会、講習会を開きて臨時的に社会教育を行いまたりしが、今回、その内容を拡張して定期性を有する学校教育の端緒を開く事に決し、私立学校令によりて、ここに当道徳科学専攻塾を開設す」とある。

廣池は、『道徳科学の論文』を大正十五年（一九二六）に脱稿しモラロジーの創立とした。次に活版印刷をし、昭和三年（一九二八）十二月二十五日に、『新科学モラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』以下、『道徳科学の論文』と略称）を出版した。三〇五部発行し、非売品としたが、天皇・皇后陛下はじめ、当時の日本のリーダーと思われる人々に献上した。

『道徳科学の論文』を公にする前年、昭和二年（一九二七）、東京下渋谷に「プロ・デューティ・ソサイティ」（義務先行報恩協会）を設立し、社会教育の拠点とした。その後、日本各地に報恩協会を設立して、社会教育を広めて行った。こうした経緯を踏まえて、「道徳科学専攻塾」に、本科と別科を設けた。

本科生については、「当専攻塾は正式の中等教育を受けたるもの、中学校第四学年を修了せるもの、もしくは右両者と同等以上の学力あるものにつき、学科試験を用いず入塾せしむ」と規定している。

別科生については、「独立に農工商業を経営する各位もしくは会社、商店、工場に勤務する各位にして一か年以上の本科に入学するほどの余暇を有せざれど、在来挙行の短日間のモラロジー講習会より以上の教養を受けてモラロジーの蘊奥を究め、真に最高品性を完成し、もって永遠の安心、平和、及び幸福を得んと欲せらるるものは、当別科に入学せらるべし」とある。「短日間のモラロジー講習会」というのは、昭和三年（一九二八）の『道德科学の論文』発表後、日本各地で実施されている、道德科学（モラロジー）の講習会である。

別科の入学資格については、「入学者の資格は学力の程度、男女の区別、年齢その他職業の如何を論せず、すべて無試験をもって入学を許す」とある。

更に修学期間については、「当別科は従来、当研究所にて行い来たれるところの、モラロジー講習会の延長なるをもって入塾者の人員を限らず、おおよそ一か年一千名養成の目的の下に、これを二回もしくは三回に分かつて入塾せしめ、その修業日数を満三か月半となし、毎日五時間モラロジーの講義を聴講せしむ。しこうして希望者はこれを寄宿舎に入寮せしめ、慈悲至誠、真実の父母にも勝る塾長以下各講師指導の下に、懇切、丁寧、至誠を含める教養を受けしめ、もって最高品性の訓練をなさしむ」とある。

また、別科生は、「希望者には、本科学生の英語会話、簿記、タイプライター、珠算等の時間出席を許すべし（ただし、これがために別に月謝を徴収せず）」とあり、本科の授業も受ける事が出来た。

組織については、「当道德科学研究所は、これを研究部、開発部の二部に分ち、研究部においてはつと

に研究生として助手を養成し、開発部においては講演会、講習会を開きて、いわゆる社会教育を行いまたりしが、今回右の社会教育のほか、学校教育として道徳科学専攻塾を開設することにいたしました⁽⁷⁾とあり、当時、構想していた道徳科学研究所は、組織の中に研究部と開発部を置き、研究部では道徳科学（モラロジー）の研究をすすめ、開発部の中には、学校教育と社会教育の部門に分け、学校教育すなわち道徳科学専攻塾では、構想をもとに、本科と別科をおいた経緯が分かる。そして、道徳科学専攻塾は、学問研究と教育の両輪で、回転をして行くことになる。

他に、「モラロジー専攻塾の特色」として、次のように述べられている。「(一) 全生徒を寄宿舎に収容して、日夜モラロジーにて人格を造り、安全この上なきこと。(二) 食費、舎費の安きこと、これに対して食事おいしく、かつおやつまで出し、大浴場の快き事。(三) ゆえに生徒はなんの費用も要らず、一か月食費十五円、舎費五円、ほかに本科は束脩^{ぶしきゅう}三十円、月謝十五円、別科は束脩五十円、月謝なし。かくのごとくにして、このほかには一厘の費用も要らずに、大学の実質を有する最高学府を卒業するを得るなり。(四) 全面積十数万坪みな松、杉の森林にて、学園この間に開かる。ゆえに、生徒の健康、体重みな増進し、中には一貫目以上も進みしものあり⁽⁸⁾」と、希望あふれるユニークな特色紹介が、条項として定められている。

つまり、本科・別科を置いた専攻塾は、いわゆる当時の中等教育卒業程度の若い生徒と、社会人の生徒を、無試験で寄宿舎生活をさせて（寮制度）、道徳教育にあたる、男女共学の学校であったのである。尚、道徳科学専攻塾は、生徒はもちろん、教師も職員も同じ敷地内に住んで指導・学習をするという、師弟同学の稀な学校でもあった。当然、廣池も同敷地内に居を定めて指導に当たった。廣池、六十九歳の年である。

廣池のいうところの「道徳科学」は、従来の「道徳」ではなく、「因襲的道徳及び最高道徳の原理・実質

及び内容を比較研究し、且つ併せてその実行の効果を科学的に証明せんとする一つの「新科学」⁽⁹⁾で、「因習的道德」とは、「通常、文明人の間において道德と称せらるるもの、すなわちここにいわゆる因習的道德(traditional or conventional morality)にして、各人種間または各民族間において歴史的に発達し来たり、主として慣例と形式とに重きを置くもの」⁽¹⁰⁾である。『伝記 廣池千九郎』五〇一頁では「礼儀作法、慣習及び同情、親切など、社会一般で道德と考えられているものを指し」と説明している。それに比較して廣池は、「最高道德」こそが、今後の人間に必要不可欠な道德であると説いている。最高道德とは、「日本皇室の御祖先、天照大神をはじめとして、古来東西の諸民族間にて聖人もしくは宗教の開祖・派祖と称せられし人々の実行せられたるものにして、その道德の性質が、人類道德の最高原理に合するものなるをもって、いまこれを最高道德(supreme morality)と命名いたしました」⁽¹¹⁾と述べている。『伝記 廣池千九郎』五〇一頁では、「釈迦、孔子、ソクラテス、イエス・キリストが実行した道德の系統と日本の皇室に伝わる道德系統に一貫する道德原理を意味する」と説明している。

以上のようなことを踏まえて、本稿では、まず、当時の「道德科学専攻塾」の特色を六点にしぼって探求して行きたい。

(二) 無試験制度について

無試験制度については、入学試験・卒業試験のない学校を、なぜ開いたのが疑問となる。それについて、廣池は、試験を設けない理由を次のように述べている。

当専攻塾規則書に、当専攻塾にては入学にも卒業にも学科試験を行はぬとしてあります。そこで浅薄な尋常人は直ちにこれを誤解して、それでは当塾からは劣等生ばかりが出ずるであらうと思うものあらんも、そうではないのです。当専攻塾にては各学生は、至誠、慈悲、真実の父母にも勝る塾長以下、各講師の寛厳よろしきを得たる監督のもとに、日夜自己の精神作用と行為とを实地に試練して進む仕組みになっておつて、それが真に実行さるるのでありまして、それを累積した結果が自然、修業年限内におけるその人の成績となるのであります。

そこで、これはその個人個人の自然の優劣でありますから、一時的に単に人為的に学科のみの試験を行つて、その人物の優劣を定むるよりかえつて極めて確実に各人物の総成績が得らるのであります。これが天地の法則に適うた試験であり、聖人の御教えに適うた試験であり、かつ所長博士が一生を通じて自己を試練し、かつ今日まで幾多の人々を指導して来たところの、人生の真の最高試験法であるのです。

元來、聖人正統の学問であるところのモラロジーの知識は、神もしくは聖人の知識であるので、人間の利己の本能から出たところの知識でないのですから、それはみな聖人正統の道徳たるモラロジーに、いわゆる最高道徳の基礎となつておる知識であるのです⁽¹²⁾

廣池の考えている「知識」修得は、「聖人正統」の「知識」であるところから、社会一般で考えている「知識」習得と、次元が異なっている感が伺える。「無試験」と聞けば、入学・卒業を目指す生徒にとって、これほど自分の利害に合う事はないだろう。しかし、それでは、就職は、進学は、と考えた場合、果た

して社会一般から認められる学校となるであろうか。現実問題、「無試験」制度を持つ「道徳を専門に学ぶ一私塾」に、生徒が実際に集まるかどうか、大きな懸念が残る。

特にモラロジー専攻塾本科生にとって、学校は実業に直結する、技術習得の専門学校でもなく、また、大受験の単位資格習得を基準として、試験により実力を図るのでもない。己の真の学力向上のみが頼りになる学校である。現実から遊離した制度と思われても、当然であろう。廣池の学校設立は、この特色一点において、「荒唐無稽」の評価を受けても不思議ではなく、「理想倒れ」となる危険性は大きであった。

更にまた、廣池は「第九条 道徳科学研究所と道徳科学教育」(十一)において、「そこで、この正統の知徳一体の教育においては、そのモラロジーにていわゆる最高品キャラクター性の中に、その人の祖先以来の種々のヴァーティユースウァーティユース 徳 も正統の学問も正統の道徳も含まれておるのです。されば、当専攻塾に入塾せる塾生諸氏は、その知徳の程度には差ありとするも、皆おのおの最高品性と最高人格とを具するところの独立の人にして、他人から監督せられ、もしくは試験せられて生きていくというような種類の人間とは異なるのであります。これがモラロジー教育の原理であるのです」と、続けて述べている。¹³⁾

廣池は、受験生の利己心に迎合したのではなく、新設の一私塾の生徒募集を最優先の戦略として「無試験制度」を設けたのでもない。聖人正統の世界から、生徒一人一人を温かく尊重し、真の最高「知識と道徳」を身につけさせようとしたのである。

廣池は続けて、「ゆえに、特に学科の形式試験のみを行うて、その各人の優劣を定むるとき侮辱を、最高人格を造ろうとしておらるる人々に向かつて行うことは避けたいのであります」とまで言い切り、「ことに、単なる利己的本能に基づく異端の学問や知識を試験して、その優劣者を社会に出したりとて、社会はこ

れがために利するところなく、かえって今日のごとくに危険思想や知能犯の増加を示し、かつすべてにわたって社会の不安を増加するに至る次第であります⁽¹⁴⁾と述べるところまでくると、「無試験制度」を「教育の社会に対する影響」まで考慮した点が明確となり、当時の時代どころか、現代社会の現状を踏まえた特別警鐘とも思え、廣池の普遍性思考の一端が見えてくる。併せて、「最高品性」をつくる「聖人正統の道徳」に基づく「聖人の知識」を学ぶのに比し、「異端の学問や知識」を否定する、専攻塾の教育も明らかになってくる。

それでは、廣池は、どのような教育方法によって学力をつけさせたのだろうか。『モラロジ教育に関する基礎的重要書類』第三条によると、「すなわちその教授法は他の大学のごとき注入法、試験法の二つによらずして、前期の卓越したモラロジ図書館を利用して指導法、自修法の二つによるのであります」という。「指導法」とは、「モラロジの根本原理によって政治学でも、法律学でも、経済学でも、其の大体を指導して開発する」方法である。「自修法」とは、「生徒が図書館にて自修」する方法である。現在の「麗澤高等学校」「麗澤瑞浪高等学校」でも、高校三年生（両校では中学校・高等学校一貫制度をとっていることから、六年生と称している）において、「自学自習」の時間が選択できるようになっている。当時と現在では、隔たりはあるが、図書館の掲板「以経説経」（経を以て経を説く）にあるように、自分で直接原典にあたって学ぶことが、継承されている。

このようにして、無試験制度の専攻塾は船出したが、昭和十年度（第一期生）の本科生入塾申し込み者数は、四月八日現在の記録で合計一七名（男子一〇六名・女子一名）、別科性は一六六名（男子一四五名・女子二一名）とあり、合計二八三名であった。なお、年度別専攻部在籍名簿では、その後の申し込みも

受けて入塾を許可したようで、本科生は合計一三六名となっている。これは昭和十一年度（一九三六）以後も同様である。このような制度の一私塾に、生徒が沢山入塾したのは、驚異的といえよう。

なお、昭和十三年（一九三八）に入塾した生徒の回想に次のようなものがある。

道徳科学専攻塾を卒業しても何の資格も得られない。ここで卒業証書を頂いても社会では通用しないと
思った。当時、学生には徴兵の延期という特権が与えられていた。しかし、私塾にはその制度も適用さ
れない。塾生は、学業の途中でも召集令状が来ると、次々と軍隊に行く。専攻塾で学んだということの
みで、何の資格もない。この塾で得るものがあるとすれば、英語に限らず、なんでも本当の実力をつけ
て社会に出ることであった。実力をつけなければいけないというので、塾生は皆、真剣であつた。⁽¹⁵⁾

「道徳科学専攻塾」は、文部省の規定では「各種学校」になるので、単位取得や試験に苦しみられず、か
えて自由に独自の教育が出来たともいえる。否、廣池は、自分の考えている学校教育・道徳教育実践のた
めには、あえて「一私塾」として出発したといえるであろう。

(二) 寄宿舎制度（寮制度）について

『道徳科学専攻塾本科規則』第八条に、「道徳科学研究所の講堂には、聖人の教えに基づき神壇を設け、宇
宙根本唯一の神霊、皇祖皇宗の御神霊の御性質及びモラロジー建設者の精神を記せる碑文を安置す。しこ
うして、専攻塾の職員及び学生は毎日朝夕必ずこれに詣^{もつ}でて、正式礼拝を行うものとす（古代の日本、中国の

官立大学、足利学校、昌平黌の積典、英国におけるオクスフォード大学をはじめウェリントン・カレッジその他のパブリック・スクールにおけるチャペル〈学校付属礼拝堂〉ならびにチャプレン〈学校専属牧師〉の制度等みな聖人の遺意なり。また晨起時、就寝時には、各自、神壇に向かつて自由に礼拝することとす⁽¹⁶⁾とある。

古代の日本や中国の国家社会の実状を研究調査し、「聖人の遺意」を究明し、パブリックスクールにおいてなお「聖人の遺意」を踏襲している現状を紹介している。同時に、神壇の教育現場における重要性をも、明快にしている。

又、「真の大学教育はもちろん、このほかすべて人間一切の教育に関する原理及び方法は、孔夫子、釈迦キリスト、ソクラテス及び世界諸聖人の実現して、もってその範を開示せられたるものにして、其の詳細は『礼記』の大学編、学記編等をはじめ諸聖人の経典に見ゆるところである。しこうして、いま当専攻塾はその形式いまだ甚だ具備せざれど、その精神に至っては、これを聖人正統の大学の精神にのっとり、傍ら英国において歴史的に由緒あるところのケンブリッジ、オクスフォードの両ユニバーシティならびにイートン、ウィンチェスター、ラグビー、ハロー、ウェリントン等のパブリック・スクールの長所を採択し、もって現下のモラロジー専攻塾ならびに将来のモラロジー大学の基礎を形造りたるものである。されば当専攻塾は、今日においては表面上単なる一私塾に過ぎずして、その形式いまだ不備を免れざれども、およそ聖人正統の知徳一体の人格教育の道場としては、あえてひそかに世界に誇るべき実質を有しておることを断言してはばからざる次第であります。されば内外の識者は、奮ってその子弟、親族及びその知人の子弟を当塾に入塾せしめられたし⁽¹⁷⁾とあり、寄宿舎制度（寮制度）は、パブリックスクールの長所を取り入れたことが分か

る。

しかし、廣池の経歴を探ると、一見不可解な事が出て来る。「モラロジー専攻塾」内における廣池の校宅といえるものに「麗澤館」がある。これについて、『伝記 廣池千九郎』六二八〜六二九頁に、麗澤館の名は「小川先生の志を継ぐ」という心でつけた」とある。又、それは青年時代に、廣池が小川含章の「麗澤館」という私塾で学んだことに由来していて、「恩師に対する深い敬慕の念が込められている」と記述されている。

廣池が小川含章の私塾「麗澤館」に入塾したのは、明治十六年（一八三三）九月のことである。この時廣池は、大分師範学校の入学試験に失敗して故郷中津に帰らず、大分に止まった。師範学校の試験に再度挑戦するため、学力を養おうとしたのである。もちろんその他にも、大分師範の助教諭、坂本永定に算術を学んで受験勉強を続けている。しかし、廣池は、この「麗澤館」で含章の代講を務めるほど、学力を高めた。

小川含章は、現在日本の社会では認知度は高くないが、江戸時代、九州の地において三浦梅園、広瀬淡窓、帆足万里の三大儒学者として名をはせた帆足万里の高弟で、『生野銀山孝義伝』の著書も遺されている。

廣池は、当時大分の長池善行寺にあった麗澤館に入塾して学び（廣池十七歳。小川含章七十二、三歳）、次の年、明治十七年（二八八四）一月、再度師範学校入学試験を受けるが、不合格となる。また、この頃「時に耳病甚だしく、且憂慮百端計出ずるところなし」「予は三月二十日より両耳大いに痛み、自ら堪うること能わず」「二十三日、帰省す。父母の憂心一方ならず」とあり、故郷中津に帰省している。明治十七年（二八八四）の六月に大分に戻り、麗澤館を退塾している。従って、麗澤館において実際に小川含章に就いて学んだ期間は、半年弱ということになる。十七歳の時、半年弱の期間学んだ先生の志を継ぎ、六十九歳に開いた「モラロジーカレッジ道徳科学専攻塾」の敷地内に、自ら「麗澤館」と名づけて居住する廣池の心は、想像を超える恩師

に対する深い尊敬と、小川含章の偉大な精神を思春期において受け止め得た、たぐい稀な精神があったと思われる。

小川含章の開いた私塾「麗澤館」は、「小川含章は歳七十余なれども、日々講堂にありて数回の講義をなし、また多数の生徒より質疑せらるるに応じ、而して少しく間あればなお自ら書を読みて倦まず。毎夜生徒寄宿舎の一室に移り、寒暑を論ぜず、十二時に至るまでは必ず書に向かう。その勤勉、青年の子弟に優れり¹⁸⁾とあるから、「麗澤館」は、寄宿舎制度を持ち、教師も共に住んで学ぶ子弟同学の制度であったことが分かる。

廣池が「専攻塾」を開設するにあたり、パブリックスクールを参考としているのは明確であるが、「専攻塾」寄宿舎制度の原型は、当然小川含章の「麗澤館」にもあったといえよう。

廣池の「道徳科学専攻塾」の敷地が、「全面積十余万坪」もあるというのも、寄宿舎制度（寮制度）の学校であり、教師も職員も、同敷地内に居住し、生徒の教育・指導にあたる制度（親代わり）からも納得できるが、既に廣池が、将来、「モラロジー大学の設立」を構想していたことから頷ける。

それでは、実際に、寄宿舎での生活は、どのようなものであったのか、探っていきたい。

寄宿舎生活も、重要な道徳教育の場であった。むしろ、本音の生活が続いて行くのであるから、道徳教育の基礎ともいえるべき「自分の心づかい」を訓練するには、実践そのものの場であったといえる。生徒全員が切磋琢磨し、共に人格を高めあつていくという制度である。寄宿舎の玄関に、「自我没却神意実現の自治制」の額を掲げて、舎監等の監督者を置かずに、自律による自治制を敷き、規則らしいものもなく、塾生は紳士・淑女として扱われた。問題が起きると、自己反省をするか、退塾するか、とされ、唯一の規則と言え

ば、それであったという。

開設当時、男子寄宿舎は、本科生は一号舎と二号舎があり、それぞれ十室で、一部屋を四人から六人が共用していた。別科生は、三号舎・四号舎（いずれも十室）、五号舎（五室）と連合住宅（四室それぞれ三人ずつ）があった。女子の寄宿舎は二棟あり、婦人館とも称していたらしい。昭和十五年（一九四〇）の記録（本科第六期生・別科第十一期生）によると、寄宿舎は全部で十九号舎まであり、連合寄宿舎も八番室まである。

開設した年の九月に電気が引けるようになるが、それまではランプの生活であった。寮という呼び名はなく、寄宿舎の番号「号舎」で呼んでいた。部屋は十二畳で、当初は六人が共用し、一間幅の押入れが三つあり、それが上下に仕切られていた。部屋の備品は、二人用すわり机が三脚、大きな火鉢が一個、小さなものが一個、ランプ（三本柱の台ランプ）一つ、炭取り、火箸、やかん一つ、木製の盆に湯のみ六個が用意されていた。各部屋北川の窓際に、ランプを中にしてコの字型に机を配置していた。十二畳の部屋に台ランプ一つであるが、十分読書することが出来たと記録にあるので、明るさは十分であったらしい。こうして寄宿舎制度による全人格教育が展開されていたのであるが、一学期は、各部屋に別科生が部屋長として本科生の寄宿舎にいた。二期からは本科生の寄宿舎、別科生（三ヶ月余）の寄宿舎に分かれ、年月が進み学年が整ってくるに従い、最上級生が部屋長となり、各学年がうまく混合する部屋割りがなされていった。

号舎長が自ら率先して実行していくので、他もそれに続き、毎朝起床と共に飛び起きて行動するという、生き生きとした生活であったらしい。

また、寄宿舎制度であるから、全学生・教職員が食堂で食事をする。その食堂にも、教室として使用して

いた大講堂の正面上に掲げてある「大学之道在明明徳」（『大学』の言葉）という扁額が、掲げられていた。食堂も教育の場であった例である。考えて見れば、全員が寄宿している学校であるので、三食、集合しているのが食堂である。廣池は食堂でも、講話や報告・注意をした。時には、至誠の足りない食事を出した、といつて謝罪をしたという。また、開設当初、塾生の食事を試食し、箸と井を置いて「ううん、やつぱりなあ、ご飯を家と同じにお茶碗で食べる方がおいしいな」と言った。このようにしなさいとは言わない。しかし明るる朝、誰がどのように手配したのか、それまでの井による配膳は消えて、すべて茶碗に取りかえられていたという。このような教育であつたらしい。

また、専攻塾本科生について、次のような塾長廣池のエピソードが残されている。

博士は上野近くにきました時、本科生へお菓子をかうと申されて、菓子問屋のあるところに車を回すことになり、問屋にて三、四種とりまぜて約三百人分ぐらいを求め、一路千葉に向かいました。夕方五時頃、小金町麗澤館（※廣池の校宅）に着く。門前、門内に職員の方々多数の出迎えがありました。お菓子は早速に袋詰めされました。夕食後に本科生全員が麗澤館の広間に集まって来ました。玄関にて大先生おおよりお話がありますと伝えながら、菓子袋を渡しました。集合が終わり、博士が出てこれられ、サイドデスクを置き、イスに座られました。博士も同じ菓子袋を前にして、にこやかに全員を見渡されて、まず「このお菓子は、わしが東京よりの帰り道で、諸氏のために味をみて買ってきたものだ、おいしいぞ」と、笑みを浮かべながら言われました。⁽¹⁹⁾

以上のようなことが頻繁にあったという。

本科生だけでなく、食堂で出す野菜その他も、講演等の旅先で、自分がおいしいと思ったものを大量に注文して食堂に送り、食事に出したことも数え切れないほどあったという。学生・教職員及びその家族も、自分の家族のように育てていた、人間廣池の姿がここにあるといえよう。敷地内に居住している教職員の家族も、喜んで学生達を自分の家に迎えて歓待したという。現代風に述べるならば、非営利組織のボランティア活動といえるが、教職員の家族も、廣池の考え・思いを十分に吸収していたことになる。現在、廣池学園（柏・瑞浪）・モラロジー研究所では、新入生を迎えると、五月に「野外昼食会」を催す。園内に数々の屋台を出し、廣池理事長・教職員が自らエプロンをして、学生・教職員及びその家族に飲食を準備して出す、初夏の楽しくなごやかな行事である。創立者の精神が、見事に受け継がれている好事例の一つである。²⁰形は勿論、そうした事例の奥にある深い愛情・心づかいに、創立者の道德教育を基盤にした寄宿舎制度、その真骨頂の実際があるといえよう。

(三) 男女共学制度について

「モラロジー専攻塾」は男女共学制度であったが、当時は現在のように、日常的に実施されている制度ではなかった。廣池は「女子教育」にも重きをおいていた。先述の『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』「女子教育に対する当研究所の方針」の(一)の他、(五)には、「当専攻塾にては、女子教育に対して深くこれを重んじ、その精神教育はもちろん、形式教育においても、本科、別科ともに、礼儀はもちろん、実用料理法、裁縫等の実習より万事、實際有用の婦人の造ることに留意し、かつ塾内においても寄宿舎、浴

室等、すべてこれを厳に男子に分かちて甚大なる注意を払えり。またもちろん通学をも許可す」とあり、加えて（六）のように、「右につき前途の安心、幸福を希^{ねが}わゆる心ある方々は、よく当専攻塾の精神を書籍ならびに実地に就きて調査のうえ、単に男子のみならず、その一族の子女をも入学せしむべし」と、子女を勉学させる保護者の立場に立てば、安心出来る入学案内がある。

日本において、大正十四年（一九二五）三月の、衆議院議員改正により、普通選挙制（初めて男性のみの選挙権）が実現するが、完全な普選法とはいえず昭和三年（一九二八）二月二十日の第十六回衆議院議員選挙において実施された。女性^{女性}は第二次大戦後の昭和二十年（一九四五）十二月に、いわゆる女性参政権（婦人参政権）が認められた。選挙権においては、このような状況がある。

その他に、廣池の早稲田大学講師時代（明治三十五年～明治四十年）、業績の一つとして、国語教科書の編纂がある。明治三十二年（一八九九）に「高等女学校令」が出され、女学校が設立されるようになった。廣池は女学校用の教科書、『高等女学読本』（全十巻）の編纂と『女流文学叢書』（全二冊）の編修をした。『高等女学読本』では、廣池が十三年間も関わった『古事類苑』の総裁でもあり、著名な女子教育者でもある、細川潤次郎（華族女学校長）や下田歌子（華族女学校学監）にも相談をした。『女流文学叢書』では、『古事類苑』編纂員の同僚、山本信哉、和田信一郎、村尾節三と編修をした。なお、『高等女学読本』には、編纂の由来が述べられてあり、当時の廣池を知る一端にもなるので紹介をしたい。「一、女子の読本には、女子特有の心得となるべきことと女子の徳の養成に必要な事柄が含まれていなければならない。二、自分は教育に深い縁を持ち、特に国家における女子の位置や力を軽視してはならないことは、東西の歴史を調査して理解しているので、女子教育には強い関心を抱いている。三、昨年以來、本書の編纂に着手した。文体は

すべて現代文によった。多少徳川時代の文章も採用した。それらは、名文というよりは穩当おんとうなものを選んだ。四、生徒が社会に出て、結婚し、家庭婦人となった時に必要な事柄を選んだ。男子のものに比べれば、理論的な文章というよりは、実際の文章を採用した」(『伝記 廣池千九郎』二八七頁)とある。このような事実例をあげると、男女不平等の時代や、男女が同権でない等の論点が起きる。したがって、廣池の「道徳科 学専攻塾」における「男女共学の制度」も、そうした論点から考えると、当時の時代にあつて、「男女共学の制度」を設けたのは、極めて画期的で進歩的と評価されるか、やはり男女不平等論者、と判断されがちであらう。

しかし、廣池の人生を探索してみると、廣池との生活を物語る書の中に、新婚時代の「一ヶ月に四、五回土曜日毎に帰宅する良人から、夜分だけでも本を読め、と申されましたが」(廣池春子著『思ひ出』九一〇頁)という記事がある。

また、廣池の小学校教師時代の著に『新編小学修身用書』という、小学校低学年用の、道徳の副読本がある。親孝行の例は勿論、江戸・幕末・明治を通して、多様な職業をも含め、全三巻、百五十の例話が掲載されている。「小学修身用書序」には、「曰く徳育。曰く知育。曰く体育。二者は鼎足併行して教育の道備わる」とあり、決して徳育のみに偏った考えで出版されたものでないこともわかる。例話は、題名を短い格言的なもので示し、生徒がいつまでも記憶しやすいように工夫されている。その百五十の、生徒に模範たる具体例話は、団体・著名人と同時に、近隣在郷の実例も多い。それらの中に、女性の模範例も多く取り上げている。

廣池は生誕地である大分県の中津の地で、京都に出るまでの二十六年間、小学校の教師(訓導)としての

奮闘努力の活動や、『新編小学修身用書』や明治以降の郷土史の先駆けとも云われる『中津歴史』の発行等、向学心に燃えていた。その時代に、新婚の妻（廣池は明治二十二年、二十三歳で結婚している）に、「夜分だけでも本を読め」と言っていた廣池の姿は、現在に照らしても、時代を超える何かがある。それは果たしてどこから来るものなのか。

当時の廣池家は、神官の系統とはいえ、中堅の農家であった。廣池は長男でもあり、兄弟姉妹の中で、当時最も責任の重い立場であるが、従来のように農業を継がず、明治からの新しい職業、小学校の教師になった。新進気鋭の教師とはいえ、女性に対しての考えも、地域社会では考えられないほど進んでいた、と判断される。

その他、大正元年（一九一二）、四十六歳で法学博士の学位を授与された際、雑誌『婦人世界』大正二年二月号に、「私が博士になったのは妻のおかげ」という記事が掲載されている例がある。これなどは、うがった見方をすれば、事実を重ね合わせて、マスコミ受けする言動ととれないこともない。事実、当時の日本社会から高い評価を受けた。

また昭和三年（一九二八）六十二歳の四月、熱海で、門人と共に楽焼の絵付けをした際、廣池は妻に感謝の言葉を書き、富士の画を描き添えて贈っているという事実がある。それは次のような文である。

春子殿 昭和三年四月 千自記 モラロジ―最初ノ著書ノ印刷着手ノ時、熱海ニ於テ 芝居ニ行カズ
美服ヲ求メズ 二十余年内助ノ功ニヨリ 内ハ子供皆無事ニ成長シ 外ハ予ヲシテ名ヲ学界ニ成サシム
然ルニ予不徳ニシテ 中途大患ニ罹リ 之ガ為ニ世ニ隠レテ新科学モラロジ―ヲ建設 此間又十余年

予ヲシテ内顧ノ憂ナカラシム。(21)

これらを重ねて考えてみると、廣池の女性に対する考え・思いは、男女平等論上からのものでなく、人として自然に愛情をもったものであると思える。

また、『道徳科学専攻塾』設立後も、次のようなエピソードが残されている。昭和十三年（一九三八）四月二日、入塾式終了後、廣池は金婚式を挙行した。その金婚式を「これは私のためではなく、モラロジーを人々が信じていかれるため、すなわち人心救済に少しでも役立つため」に開いたと述べている。そしてこのころ、側近の者が集まっている時、「モラロジーの第一番の功労者はだれか」と聞き、だれそれだと思う、と皆が口々に答えた時、「おまえたちはそう思うだろう。しかしそれは間違っている。モラロジーの第一の功労者は、わしの家内なんだよ」と言ったという。更に廣池が、臨終前の頃、大穴温泉（現廣池千九郎大穴記念館）に春子夫人を迎える時、「自動車の中に回転ごたつを入れて、迎いの車を温めておくように、齒が悪いから、スイカの皮でなくて中味を漬けておくように。ただ中味は時間がたつとまずくてたべられなくなるから、二時間ほどであげなさい」と側近に指示したという。そして亡くなる前、夫人と二人だけの時、感謝をこめて「ありがとう」を述べた話が、春子夫人から伝え残されている。

改めて、『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』の「第九条 道徳科学研究所と道徳科学教育」を読み返すと、(一)に「当研究所ならびに専攻塾は、道徳科学ならびにその内容と実質とを形造るところの最高道徳の原理ならびに実行の方法を具体的に教授し、知徳一体の聖人正統の教育を施し、もって学生の品性を陶冶養成し、しこうして、その最高人格の獲得に資せんとするものである」とあり、これは、人間誰にも必

要とされるものであることが分かる。更に(三)には、「モラロジー教育は聖人正統の学問、思想及び道徳に立脚するがゆえに、人間の利己的本能の産物たる現代における異端の学問、思想、主義、信仰、及び道徳等の誤謬を指摘して、人間の正しき権利発生の原因、生存競争の正しき意味、健康、長命、開運及び家運万世不朽の新運命を開拓する原理ならびに方法等、人間生活上に必要な法則を科学的に教授して、中等以上の教育を受けたる現代の青年を覚醒せしむる実力を有する知徳一体の教育なれば、いやしくも子孫を思い家運の長久を思う方々は、その子弟をして奮って当専攻塾に入塾せしめられたし」と、専攻塾で学ぶことの重要性を勧めている。

「子孫を思う」「家運の長久」に男女の別はなく、ごく自然、人間全体、一人一人、必要不可欠な問題であることが分かる。続けて、「さらに、いま少しくつまびらかにモラロジー教育の精神と方法を述べれば、本塾におけるモラロジー教育の目的は、(一)各個人をして安心、平和及び幸福享受を実現させ、(二)しこうして、その国家ならびに社会の真の永久の繁栄をなさしむるにあるのです。ゆえに教育の方法は、ことごとくみな深遠偉大なる宇宙の真理の基礎のうえに実用的なるカルチャー (Culture) すなわち教養を人心に施すのである」と述べ、人類全体への仁愛の精神を発露させている。現代のみならず、今後の人類社会の永遠の安心・平和・幸福の実現を望む、廣池の真剣な精神が述べられているといえよう。「男女共学制度」を、「道徳科学専攻塾」教育の特色としてあげたが、その背景はこのような、廣池の精神に支えられていたと述べることが出来る。同時に、「寄宿舎制度」にみられるように、他の人々を、「自分の家族」として考えている廣池にとつて、「男女共学制度」は、至極当たり前の制度であったといえよう。

(四) 外国語教育について(本科生)

国際的日本人の育成を目指していた塾長廣池千九郎は、英語の学習に主力を注いだ。そして、従来の旧制中学における「英語教育」に重きをおかず、会話を主としたオーラル方式(口誦方式)とリピート方式(反復方式)を採用した。そのため、外国人教師はもちろん、アメリカ在住経験教師や、語学に堪能な教師を雇い入れた。テキスト(リーダー)全文の暗誦に加え、エッセイや英字新聞、英文日記等の教材を使用して教授した。

高学年になると、古典語をはじめ地理や経済など、一般の学科を原書で教え、徹底した英語の実力養成教育が行われた。英語をもとに、ドイツ語、中国語を第二外国語として取り入れたという。当時の生徒の回想記録によると、英語の暗誦その他、生徒達はよく勉強して実力をつけたらしい。各学年がどのようなテキストを使用したか、整理されたものは見当たらないが、卒業生の回想や記録に、旧制中学用の市川三喜編『ニュー・ライト・リーダー』や、チャールズ・ディッケンズの原書、マッコレー著の伝記『ロード・クライブ』等の名がある。他に「夜十時の消灯後、街灯の下に陣取り」、「暗誦熱は伝染病のように広がって」、「朝の二時、三時頃まで頑張る者」、「寝言で一ページくらい暗誦するもの」、「英語の会話熱も盛んで、そこらを散歩してもかたことの英語がよく聞こえて来た」、「お互いの会話は日本語を使わないで、英語にしよう」等々の記録がある。また、熱心さが高じて、深夜まで街灯の下などで勉強することは、廣池塾長から、体をこわしては何もならない、諸君は大器晩成で行きなさい、という講話があり、取りやめになったとのことであるが、いずれにしても、当時の語学教育の一端を知ることが出来る。

英語弁論大会も盛んであった。昭和十年(一九三五)十一月十日、前首相齋藤実が来塾した際、廣池は一

同に紹介したあと、「閣下は英語にご堪能であると承つて居りますから、今日は学生の英語を聞いていたでいて、ご批判を仰ぎたいと存じます⁽²⁾」と述べ、二人の学生総代に英語でスピーチ（一人は歓迎の挨拶、もう一人は、当時発生していたエチオピア戦争の批判）をさせたという。

また、次のような話もある。当時は外国人は少なかったので、休日に、有志たちで日比谷公園に出かけて、外国人と子供が遊んでいるところに行つて、会話の勉強をして来る。帰省時に外国航路の便を予約し、横浜から船に乗り、一等船室に乗船している外国人を訪問して自分の英語の力を試して神戸で降りる。そのような先輩の武勇伝を聞いて後輩も見習う。そういうことが流行していた、という。後に専攻塾が大学となった時、学部は外国語学部のみのカレッジであったが、イギリス語学科・中国語学科・ドイツ語学科ができた（学校名には、「麗澤」が付けられた）。

現在の麗澤教育も、英語教育には定評がある。ここで「麗澤瑞浪中学校」の一例を出したい。

深澤了教師の英語弁論大会（中学生対象）の指導である。深澤氏は英語弁論の指導を長く続けてきたが、平成四年から高松宮・高田宮杯の全国大会に数多く出場させた（平成四年、七年、九年、十年、十一年、十二年、十三年、十四年、十七年、十八年）。そのうち平成十四・十八年はファイナル（百五十余名の出場者数の中の二十七名）に残り、十八年度は全国三位の栄誉を得ている。深澤氏も平成十年度から十九年度までに七回以上全国大会に送った功績で表彰を受けている。しかし、注目したいのは、深澤氏の発言である。国の恩人の系列として、御皇室を尊重する教育をしている学校であるが、深澤氏は「このようなことで、少しでも御皇室や御祖先に安心して頂けるなら、こんな幸福なことはないですね」と。

そこには素直に、道徳を専門に教育をしてきた学校の伝統と、私達日本人の祖先が御皇室を尊重し、とも

に苦勞を重ねて歩んで来た歴史の事実・文化国家の姿に対する「報恩」の思いを、素朴に見た思いがするからである。同様に、「親が少しでも安心して頂けたなら」という、身近な道徳的な思いをも感じたからである。外国語教育指導の奥に、このような思いがあったことを知った、ほんの一例である。ともあれ、麗澤教育では今なお、外国語教育への深い指導が継承されている。⁽²³⁾⁽²⁴⁾

(五) 教育理念について

さて、このように、大変に特色のある専攻塾であるが、その教育理念は、どのようなものであったのか、気になるところである。

先述の『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』の第九条に、教育理念が掲載されている。が、理念の内容としては、昭和十二年（一九三七年十二月三十一日発行の『道徳科学及び最高道徳の実質并に内容の概略』の中の「第六章 モラロジー教育の要領 第一項（第五項）」の方が明確である。それによると、一、知徳一体、情理円満の教育（即ち最高品性完成の教育）二、出藍の教育 三、更生の教育 四、大義名分を明らかにする教育 五、個人の安心と世界永遠の平和を実現する教育 六、自己反省の教育と自主独立の教育 七、環境順応の教育 に大別される。これらの説明を『伝記 廣池千九郎』⁽²⁵⁾から引用してみる。

一、知徳一体、情理円満の教育——知とは神の知識を意味し、これには真の道徳が含まれている。知徳一体の教育を体得すれば、理性にも感情にも偏ることなく、正義と慈悲が調和して、情理円満な人格

が形成される。※廣池は、「神」を「自然の法則」とも述べている。

二、出藍しゅらんの教育——『荀子じゆんし』に「青は藍あゐより出でて藍より青し」とある。教師は、全力を挙げて学生を指導し学生は自修研学に励み、歳月を積んで、教師より賢く善良になるという進化教育である。

三、更生の教育——人間の利己的精神を除去し、最高道徳の精神に生まれ更かわらせることである。これによって、運命が改善される。

四、大義名分を明らかにする教育——大義名分とは、人間の行うべき大道であり、伝統の原理、すなわち国家生活、家庭生活、精神生活及び社会生活における諸恩人に感謝、報恩の実践ができる人間を養成することである。

五、世界の平和を実現する教育——これは、主義（イズム）を注入する教育ではなく、最高品性をつくり、国家社会に奉仕する人間をつくることによって可能となる。

六、自己反省の教育——運命成立の根本的原因が自己の精神作用と行為にあることを理解すれば、すべてのことについて自己に反省することができる。つまり自分に生じるすべてのことに対して、その責任を自己に負うことによって自主独立の人間になれる。

七、環境順応の教育——世界の人心の開発救済のために、自分の置かれているいつさいの境遇に対して至誠心をもって順応していくことである。そうすることによって、人種、民族、階級、主義、利害、感情などの相違にかかわりなく、開発救済が可能になる。

以上の教育理念は、本科生の他に、別科生、いわゆる社会人をも対象としている「道徳科学専攻塾」の教

育理念であるので、現在の学校教育と一列に考えて評を加えることは出来ない。ただ、「全人格教育」「生涯教育」等の「道徳教育」として考える時、多くの「普遍性」を見いだすことが出来る。同時に、世代を越えた教育理念であることが分かる。

これらの教育理念の中に、「五、世界の平和を実現する教育」がある。当時、世界が再び戦争に向かって行く時代である。果たして、廣池はそれについてどのように考えていたのだろうか。最も大きい問題で、むしろ不可能と思われる問題だけに、廣池の本音と実際に迫る意味で、論を進めたい。探求していくと、驚くべき具体的な実践が数多く出て来る。今回は、その一端を述べて、他の教育理念も含め、今後の探求の課題としたい。

廣池の「平和実現」に向けての具体的な実践は、モラル・サイエンス（後のモラロジー）の普及によって、政治・経済・教育等を改善していくことにあった。この当時の、特に労働問題の解決や数多くの講演活動、また、要人への働きかけ、提言に、その実践を見ることが出来る。中でも、鈴木貫太郎への命がけの働きかけ・提言は、示唆・先見性に富んだ深いものがある。

廣池と鈴木貫太郎との縁は、現在記録に残されている点から考えると、昭和三年（一九二八）十二月二十七日からである。この時の鈴木は、海軍軍令部長の職にあった。すでに、『道徳科学の論文』を同月二十五日に発行し、天皇・皇后両陛下はじめ、日本のリーダーと思われる方々に、献上の準備をしている時である。（『道徳科学の論文』献上名簿に、鈴木貫太郎の名がある）『廣池千九郎日記』（以下、『日記』）に、「午後、海軍軍令部長の催しにて、大佐以上十五、六人聴講」とあり、海軍に道徳科学の話をしている（次の日には「畑第一師団長催しにて、司令部にて中佐以上二十五、六人聴講」とある）。『道徳科学の論文』発行日付け

直後に、軍部で道徳科学の話をしている現状がある。次は昭和四年（一九二九）六月二十四日、「夜、一条公邸に鈴木侍従長、奈良武官長を招待せられて予の御話を聴かしむ。食事の時、公爵は両侍従長に向かつて、元田永孚先生の明治天皇を輔導申し上げしことと、今日御両所の御使命は同一なれば、よろしく御願い申し上げると御話ありしに、両侍従長は齊しく頭を下げたり。実に今夕の会合は、日本国体上歴史的事実として特記すべき重要事たるを覚ゆ」と『日記』にある。そして昭和七年（一九三二）二月一日、二日、三日、二十八日、二十九日と、鈴木貫太郎への出状が続く。

二十七日の『日記』には、「午後、七時、ニュース。（一）在上海米国石油会社は日本に経済断交をなす。（二）英国名士、連名にて日本を中国侵略と見て「タイムズ」に公開状を発す。二十五日、日本若槻、阪谷など名士の連名にて日本の立場を弁明す。それかくのごとく予の本月一、二、三日に亘りて侍従長に忠告せしこと、事實に現われ来らんとするに至れり。日本の軍部は、果たして米一国または英米二国以上と戦う心ありや。万一これありとせば、これ国を誤ること大なるものならん。上、陛下の御心の中を察し奉る道、このほかになしとするか。下には国民の惨状、世界の動乱をいかんせんとするか。予には平和の方法をもって日本人の世界各地に発展する方法あり。単に世界列強と戦争して、もつて国民の權益を維持せんとすることきは、時代錯誤にはあらざるか。予は更に考究の上、徐々に当局ならびに識者に謀るところあるべし」と記している。

一日の出状とは、「英米二国の干渉が明白に現われ、南清における日本の主張を貫徹すれば、二国以上と衝突になります。負ければ滅亡に至り、勝つても長日月のうちに国家瀕死の状態になります。南清の兵と人民を引き上げ、国を挙げて道徳生活に入れば、大和民族の最後の勝利疑いがありません⁽²⁶⁾」という内容であ

る。書簡を陸海空の当局に御内示下さいとも、付け加えている。

二日は、「危機刻々に急迫して、この機会を逸すると取り返しがつかなくなります。聖人は、兵は平和の保障物で殺人の利器とは考えていません。例え戦争が有利になっても時代の変遷で、昔の日清、日露のようには行きません。戦死者の悲惨、財力の耗費、国民の疲労を思えば、中国を放棄しても惜しくはありません。平和の方法で、はるかにこれ以上の収穫を得ることが出来ます。世界思想は非常に変化しています。戦争の事情も昔とは違い、昔と同じ結果は得られません。欧米各国が日本に対して今のように思っている今日においてはなおさらです。一切を隠忍自重して時期を待つのが良いです。自分には、政治、外交、教育、移民、殖産、興業の方法、確固たる具体案があります⁽²⁷⁾」という内容である。三日も「南中国在住の日本人、日本軍、全部引き上げるのが良いです。この機を逃しては臍を噛む悔いがあるでしょう。天皇陛下と国民の安危は、在中日本人の財産よりは大きなものがあります⁽²⁸⁾」等々であり、「なおこの書面、何人の御目にかけても苦しからず候」と、飛行機便書留で発送している。いかに自分の命を顧みず、血を吐くような真剣さで出状したかが分かる。廣池の御皇室と国民の幸福、世界の平和への希求の高さを知ることが出来る。

前年に満州事変、この年に上海事変、そして五・一五事件と続き、日本に限らず世界の危機が迫っている。昭和九年（一九三四）、ドイツではヒトラーが総統に就任した年、廣池は『道徳科学の論文』第二版を出版し、天皇皇后両陛下に献上する件を、湯浅倉兵衛相、鈴木貫太郎侍従長と面会相談し、許可されている。そして昭和十一年（一九三六）二月二十六日、鈴木侍従長は襲われ、瀕死の重傷を負う。「二・二六事件」である。この時、廣池はすぐにお見舞いを贈るが、鈴木貫太郎侍従長からの御礼状（三月二十一日付）が、昨年、廣池千九郎記念館で見見された。文章は代筆であるが、「鈴木貫太郎」「廣池千九郎殿」の署名

は、直筆である。以下はその文面である。

拜啓 時下高堂、 愈々御清祥 慶賀 奉り候。 陳者、先般、遭難に際しては、早速御鄭重なる御見舞を忝うし、深く感謝 奉り候。 当時、身に三弾を受け、出血の為、一時脈拍 殆んど消滅せしも、幸危機を脱し、爾来、経過極めて順調に相運び、最近、腰部の一弾を剔出し、最早 数週間後には全快の見込相立候間、憚りながら、御安心下され度、是れ、全く神助と、皆様の御同情とに依るものと、感激措く能はざる所に之あり候。 茲に略儀ながら、書中謹みて御礼申上度、斯くのごとく御座候。 敬具

昭和十一年三月二十一日

鈴木貫太郎

廣池千九殿

このように「世界の平和を実現する教育」の基は、廣池自身の実践を見ると、特定のイデオロギーを信奉していたのでもなく、政党に所属して運動をしたり、政治結社活動をしていただけでもなかった。まったく廣池個人の、自分の出来ることから始めた、平和な道徳的方法であったことが分かる。一つ一つ積み重ねていく、粘り強い実践でもあった。

それは、病身、高齢であっても、純粹に人類社会や国家の将来を思い、人間社会の安心・平和・幸福の実現に邁進した、人間廣池千九郎の、尊い道徳心の現われともいえよう。

廣池はこの後、昭和十三年（一九三八）六月に逝去するが、その三年半後に、日本は第二次世界大戦に突入することになる。そして昭和二十年（一九四五）八月、人類史上、未曾有の大量虐殺兵器、「原子爆弾」

を二度にわたって投下され、終戦を迎えるのである。その時、昭和天皇と心一つにして終戦へ運ぶことに苦勞したのが、「二・二六事件」で一命を取りとめ、侍従長から首相になった鈴木貫太郎であった。

この他に、昭和十二年（一九三七）一月二十四日に、廣池が「麗澤館」で塾生に話した「道徳科学専攻塾の教育の特色と方針」⁽²⁹⁾がある。その中で、「全世界を感化して、永遠の平和をこの地上に立てんでどうか」と述べていることは、「世界の平和を実現」して行こうとする廣池の、日常における真剣な思いを象徴しているといえるだろう。同時に、現代に生きる私達は、人間社会全体の古くて新しい究極の課題を、廣池によって改めて与えられたとも考えられる。

（六）道徳の授業

①本科生

専攻塾の道徳教育（正しくは道徳科学教育）は、二つの点に特徴があった。第一点は、寄宿舎制度を通して、全人格を教育していく点である。もう一点は、講義授業を通して教育していく点である。本科生の講義授業は、『道徳科学の論文』を中心に実施された。当時の資料によると、塾長廣池千九郎は、「一、神壇の説明 二、額ならびに聯の説明 三、『道徳科学の論文』中、特に第十二章、第十三章ならびに第二版追加文の要点につきて説明 四、政治学、法律学、経済学、ならびに財政学の原理について」となっている。他の教師は、すべて『道徳科学の論文』を区分けして行っていた。又、塾長は、この他に、麗澤館ならびに食堂等で、たとえば「新入塾生に向けて」「学問成功の秘訣」「終了後の心得」「世界を導く人間になること等」、その他の訓示を、時々、会食をまじえて講義したりしている。専攻塾本科生第一期生で、現在、麗澤大学名

誉教授の宮島達郎氏（九十一歳）は、本年の「廣池千九郎記念館講話」で、次のような講話をした。

「入塾式の前日、麗澤館で、廣池千九郎塾長から、皆さんご苦労さん、と親しみを込めてねぎらいの挨拶を受けた。塾長で、法学博士でもあるということで、私達は大変緊張していたが、実にやすらぎのある言葉だった。そして、この学校に入ったということはたいしたことである、と云われ、話を伺った。自分が十八歳の時だった」と、昨日の出来事のように、聴講者に伝えている。

②別科生

別科生は三ヶ月余の期間であるが、やはり寄宿舎制度を通しての全人格教育と、『道徳科学の論文』の講義を中心に行われている。その他の教材に『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』が使用されている。当初の教室は「大講堂」しかなく、講堂内の中央通路を境に緑色の幕をさげ、正面に向かって左側が本科生、右側が別科生に分かれていた。別科生の授業はすべて、道徳科学の授業である。本科生との合同の道徳科学の授業もあった。又、聖人の教説などについて、ガリ版刷の教材も配布されたりしたという。別科の生徒も、麗澤館での塾長の講話、食堂での講話等は、本科生と変わりがない。その他に建設当初でもあるので、各奉仕作業があった。また、寄宿舎制度でもあり、お風呂の入り方、トイレの使い方、一挙手一投足、全てが道徳科学の実践であった。

考えて見れば、道徳科学は心づかいからの実践であるので、従来の道徳とは、随分と効果が違う。しかし、心づかいからの実践であるので、人には慈悲の心で、自分は聖人の教え・心づかいを模範に、品性を向上させて行くのであるから、自己認識の正確性を希求する「自己反省」の毎日になる。道徳科学の精神を一言で述べるなら、まさに『最高道徳の格言』にある、「慈悲寛大自己反省」の精神に尽きるであろう。塾長

自ら実践をし、教師もそれに続く。ここが、道德教育の基礎の核心であると思う。

二、廣池千九郎の「心」の支柱

「道德科学専攻塾」の創立者の教育理念の説明の中に、注目すべき点がある。「運命が改善される」「世界の平和を実現する教育」「最高品性をつくる教育」「開発救済」等々の点である。これらは、廣池の生きた時代は勿論、第二次大戦後から今日までの日本の教育を考える時、果たして「教育の範疇」に位置していたのだろうか。しかし、廣池が教育の中で、これらを考えているのは、当然、人間一人一人「安心」を得て欲しい、「平和」の中に生きて欲しい、「幸福」な人生を送って欲しい。そのような深い思いであろう。

しかもそれは、「永遠」であって欲しいのである。可愛がって育てた、子、孫、ひ孫、子孫達が、個々人の「運命」や「時代」に翻弄されて、悲惨な結果を迎えては、何のために苦勞して育てたか分からない。祖先、先人の偉大さは、後に続く子孫・人類に、幸福に生きて欲しいと、常に願いつつ懸命に努力して生きた人生にほかならない。廣池もそのように生きたのであるが、廣池の人生を探求していくと、やはり、注目すべき「連環」がある。それを探るに当たり、重複するところもあるが、改めて廣池の人生を振り返りたい。

廣池の青少年時代は、郷土において小学校の教師（訓導）になる事が、目標であった。当時あって、早くも「ペスタロッチ」を敬慕し、「我れ、家産一万円に達すれば孤児五十人を養わん」と書き付けている。しかし師範学校の試験が不合格になり、大分に止まって勉強した私塾「麗澤館」の小川含章塾長の影響を受け「私の家は神官でありまして累代皇室の御恩にあずかっておることが他の家より深い、その報恩をするの

が自分として大切なことであり、次には小川含章先生の遺志を嗣^つぎたい、さすればどうしても田舎において黙^{もく}つてはおれない。どうかして都会に出でて正しい学問をいたし、しこうして皇室に貢献^{けん}し奉^{ほう}りたい⁽³⁰⁾という志をもって、廣池は「あらゆる歴史の材料」のある、京都に出ることになる。廣池、二十六歳の八月である。すでに歴史書『中津歴史』においては、「真正ノ歴史トハ年代記伝記系図等ヲ其材料ニ供シ、地理学言語学人類学等ノ学理ヲ之ニ応用シテ、人事社会ノ栄枯盛衰ニ関スル事實ノ系統ヲ明ニシ、以テ其複雑紛糾ヲ極ムル人類ノ行迹ニ就テ一定不動ノ法則アルヲ示スモノ」という見解を述べている。

その後、『史学普及雑誌』『皇室野史』、東京に出て『古事類苑』の編纂、『支那文典』の発行他、早稲田大学の講師、神宮皇學館の教授、そして法学博士と、専門学を極めて、上りつめて行くのであるが、長年の努力は肉体を過酷なまでに蝕み、大正元年（四十六歳）の大患となるのである。

この時廣池は、反省を深め、精神的な大転換をしている。「自分は僻^へ地に生まれて、身を貧窮^{ひんきやう}より起し、神及び聖人の徳をはじめ、二、三先輩の高恩によりて今日を致したのでありますから、この上に高位高官に昇り富貴の身になるということは末恐るべきことであります。今幸いに大患^{かみ}に罹^かつて生死の間に彷徨^{ぼうぼう}するに至ったのは神の警告であらう⁽³¹⁾」と考えたとある。また別の著書には「先年大患のときに神様に対して、人心の救済及び世界永遠の平和の基礎の確立を誓うたのでありますから⁽³²⁾」とある。この段階でも深い精神の高まりを証明することができる。しかし廣池は更に、「一切の名誉及び利益を棄^すてて、世界人心の開発及び救済をなすことに決心いたしました⁽³³⁾」とあるに至っては、「自分の目的」、「志」、「人生の指針」等々の表現では腑に落ちないものがある。それは「大きな支柱」に支えられた、廣池の、何ものかの働きがあるように思えてならない。この時から十七年の歳月を経て、『道徳科学の論文』は世に出るのであるが、大正四年に

廣池は「自己反省」によって「慈悲寛大自己反省の精神の体得」の体験をしている。地位・名譽他、沢山のものを棄てて入った天理教本部の引退であるが、廣池の言葉を引用すると、「予の引退は、教典、儀式の内容が甚深偉大なる天啓の教えの全部を現わして居らぬものであるゆえに、これを改めたしという意見のところ、外部にてこれを誤解し、問題が大きくなりしたため、申し訳なしとて本部と協議の上、引退するに至りしものなり」とあり、また「何となれば、たとい曲直いずれにあるも、事の起こりし当時にありては、識者もこれを識別し能わざることは、近く徳川時代のお家騒動に徴しても明らかなり。仙台萩の伊達だての忠も兵部ひょうぶの悪も今より見れば明らかなれど、外部より見ればその当時は決して明白なるものにあらず。故にこれを公に争う時は、やはり一の争いと見なさるるに過ぎず」と、例え自分が正しくても、争うことの無益さを述べ、更に、「かくては、自ら争うては平和唱道の世界の開祖たることは出来ず。またその主義をもつて人を感化すること能わざればなり。すべていかなる事も、これを自己に反省し、謝罪し、感謝してこそ、人格の力は強大なるものなれ。かくてこそ始めて人心を救済することは出来るなれ」と、「人心の救済」の奥義に触れている。

以上の言葉の中に、道德教育の尽きるどころ、「自己反省（自分を冷静に顧み改善すること）」「感謝」「人格（品性）の高さ」が感化を与え、「人の心を救う」ことの偉大さが重要であると述べている。しかし、ここに「自ら争うては平和唱道の世界の開祖たることは出来ず」という言葉がある。廣池は「平和唱道の世界の開祖」になることを自覚しているのである。大困難にあっても、廣池の心の中には、堅い「支柱」があった。「支柱」あればこそ、崩れることなく、大困難を支え、乗り越えることが出来たのである。それはこのような考えに現れている。

聖人正統の教学をもって現代の世界の人心を根本的に改善せずんば、全世界の人類を真に永遠の安心・平和・幸福に導くを得ず。モラロジの天より受けたる大使命はこの大任を果たすにあり。予が四十年来の苦心も、予を助けて努力しつづある篤志家の目的も、皆全くここにあり。モラロジの研究をはじめ、モラロジの講演会、研究会、学校の開設もその目的皆ここにあり。⁽³⁷⁾

廣池の「心」の支柱は、「大なる使命感」であった。しかもその先に予定されているのは、「人心の救済及び世界永遠の平和の基礎の確立」なのである。その基礎に、『道徳科学の論文』の発行があり、平和への提言があり、社会教育の始めがあり、「道徳科学専攻塾」の設立があり、「研究」と「聖人正統の教育」の出発があり、「生涯教育」「累代教育」へと続くのである。同時に、「世界永遠の平和の実現の基礎」⁽³⁸⁾確立のため、「学問研究」をすすめて、多方面の構想・研究課題を残し、同時に「慈悲寛大自己反省」の心づかいで、日々、品性を向上させていったのである。

廣池千九郎を手がかりとして道徳教育・特にその基礎となる心を探求して来たが、基礎となる心、それは自分自身の「使命感」にあるのではないだろうか。私達が奇跡的にこの世に人間としての生命を受けたことに関係するとするならば、その「使命感」は、ひとり、廣池のみにあるのではなく、私たち一人一人にある「尊い使命感」であろう。それは決して利己的・自己保存的・自己満足的なものではなく、廣池の使命感のように、自分も相手も社会をも生かす、尊い真の崇高なる使命感であろう。

注

- (1) 『道德科学専攻塾 (The College of Moralogy) 本科規則』(『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』昭和十一年(一九三六)六月三十日発行『人間教育における道德の価値』平成三年九月十日発行三三〇頁所収)
- (2) 同、三三三頁
- (3) 『道德科学専攻塾 (The College of Moralogy) 別科規則』四〇〇―四三三頁所収
- (4) 同、四〇一頁所収
- (5) 同、四一頁所収
- (6) 同、四一頁所収
- (7) 『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』第九条
『道德科学研究所と道德科学教育』九五―一三二頁所収
- (8) 同、四四頁
- (9) 『道德科学の論文』一冊目(第一卷第一章第一項)五頁
- (10) 『道德科学の論文』四冊目 一九三頁
- (11) 同、一九三頁
- (12) 『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』「第九条 道德科学研究所と道德科学教育」(十一)『人間教育における道德の価値』一一〇―一二二頁所収)
- (13) 同、一二一―一二二頁
- (14) 同、一二二頁
- (15) 『廣池学園五十年史』第一卷
- (16) 『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』『人間教育における道德の価値』三五―三六頁所収
- (17) 同、一〇一―一〇二頁
- (18) 廣池千九郎著『新編小学修身用書』巻の一―十五
- (19) 井出大著『随行記録 晩年の廣池千九郎博士』一三七頁
- (20) 第二次大戦後の寄宿舎(寮)制度でも、定期・不定期に、食堂や部屋にデザートやおやつが出され、それは現在まで続いている。
- (21) 廣池千九郎記念館所蔵
- (22) 『廣池学園五十年史』第一卷
- (23) 柏市にある「麗澤高校」では「言語技術」と言う新指導が実践されている。
- (24) 廣池は一八七九(明治十二年)、十三歳で小学校修了後、近くに上等小学校がないので、家から一里半ばかり離れた「中津市校」に編入学し、翌年の六月、優等の成績で卒業した。中津市校は、一時在校生六百有余人を用い、関西第一の英学校と言われた。設立には、旧藩主奥平昌邁、旧藩士福沢諭吉、小幡篤次郎等が関係している。本科と別科に分かれ、本科は英書よっての授業、別科は翻訳書を使用しての授業、読み方、作文、習字、算術、物理、地理、生理、その他の授業が行われた。明治十六年廃校。福

沢論吉の『学問のすゝめ』は、中津市校の開校を祝して起草されたものである。(『伝記 廣池千九郎』より)

- (25) 『伝記 廣池千九郎』 六三九～六四〇頁
- (26) 『廣池千九郎日記』 4 二〇五頁・意訳
- (27) 同、二〇六～二〇七頁・意訳
- (28) 同、二〇八～二〇九頁・意訳
- (29) 『人間教育における道徳の価値』 二二七頁
- (30) 『回顧録』 二〇七頁
- (31) 『道徳科学の論文』 八冊目 二六七頁
- (32) 『回顧録』 六三頁
- (33) 『道徳科学の論文』 八冊目 二六七頁
- (34) 『廣池千九郎日記』 1 二九二頁
- (35) 『廣池千九郎日記』 1 二九二～二九三頁
- (36) 『廣池千九郎日記』 1 二九三頁
- (37) 『モラロジ―重要教訓集 第一輯』 二二頁 『改訂 廣池千九郎語録』 二〇七頁
- (38) 『道徳科学の論文』 一冊目 一〇六頁